

Press Release

2019 年 7 月 吉日

アーティストが考える「都市」とは？

《都市のヴィジョン - Obayashi Foundation Research Program (大林財団の助成事業)》
第 2 回 助成対象者

シアスター・ゲイツ / **THEASTER GATES** (アーティスト)



Photo: Rankin

公益財団法人大林財団は、2 年に 1 度、豊かで自由な発想を持ち、さらに都市のあり方に強い興味を持つ国内外のアーティストを 5 人の推薦選考委員 (※1) の推薦に基づいて決定し、従来の都市計画の枠組みとは異なる視点から都市におけるさまざまな問題を研究・考察し、「住んでみたい都市、新しい、あるいは、理想の都市」のあり方を提案・提言する機会として、《都市のヴィジョン - Obayashi Foundation Research Program》と題した新しい助成プログラムを 2017 年にスタートいたしました。

第 1 回目はアーティストの会田誠氏が選出され、「GROUND NO PLAN」展を開催しました。会田氏が考える未来の「都市」や「国土」をドローイング、完成予想図、建築模型、絵画、インスタレーション、映像、テキストなど、多様なメディアを用いて発表されました。 (<https://www.obayashifoundation.org/urbanvision/>)

第 2 回目の助成対象者として、アーティストのシアスター・ゲイツ氏に決定しましたので発表いたします。

現代美術の分野で大きな影響力を持ち、国際的に活躍するシアスター・ゲイツ氏は、貧困や暴力犯罪が深刻化している自身の生まれ故郷アメリカ合衆国・シカゴのサウスサイド地区で、2006 年からふたつの建物を図書館やキッチン、パフォーマンス・スペースとしてリノベーションし、地域の人々が集まる空間を創出。「ドーチェスター・プロジェクト」として拠点を増やながら社会的課題に取り組み、展覧会など様々な形で活動を継続し、地域産業に貢献しています。

シアスター・ゲイツ氏は、今回の助成を受け、調査・研究のため、この夏日本を訪れる予定です。内容詳細については決定しだいご案内申し上げます。



Theaster Gates, *Dorchester Projects*, 2008-ongoing The Listening House and the Archive House located on Dorchester Street in the neighborhood of Greater Grand Crossing on the South Side of Chicago Photo: Sara Pooley, Courtesy the artist, White Cube, London, and Regen Projects, Los Angeles

シアスター・ゲイツ THEASTER GATES

1973年、イリノイ州シカゴ生まれ、同地在住。シアスター・ゲイツ・スタジオは、ゲイツの芸術的実践の場として築かれました。ゲイツは地域論や土地開発に注目した作品や彫刻、パフォーマンスを生み出しています。都市計画・保存計画に対する関心と経験を活かして、見捨てられた地域を蘇らせ、場所についての語らいをコンテンポラリー・アートの最前線へと導くことで、アートと生活の隔たりを埋める活動を行っています。

ゲイツの創作は「ものに宿る生命」の可能性への着目に根ざし、アートの価値、土地の価値、人間の価値のいずれをも向上させることで、アートの世界における資本の再循環を構築しました。その作品に通底しているのは、黒人のスペースを正統的に（公的に）つくりたいという共有の願いを、アートの力と社会的実用性にのっとり実現させようという意識です。

主な展覧会

- 2019年 「The Black Image Corporation」 グロピウスバウ（ベルリン）「Amalgam」 パレド・トーキョー（パリ）
 2018年 「The Black Image Corporation」 プラダ財団（ミラノ）
 「Black Madonna」 シュプレングル美術館（ハノーファー） バーゼル美術館（スイス）
 2017年 「In the Tower」 ナショナル・ギャラリー（ワシントンD.C.）
 2016年 「How to Build a House Museum」 オンタリオ美術館（トロント）「Black Archive」 クンストハウス・ブレゲンツ
 「True Valu」 プラダ財団（ミラノ）
 2013年 「Soul Manufacturing Corporation」 ホワイトチャペル・ギャラリー（ロンドン）
 「Prima Materia」 プンタ・デラ・ドガーナ（ヴェネチア）
 2012年 ドクメンタ（13）（カッセル）

主な受賞歴

- 2018年 ナッシャー彫刻賞
 2017年 クルト・シュヴィッターズ賞、フランスのレジオン・ドヌール勲章
 2014年 アルテス・ムンディ

主なパブリックコレクション

バーゼル市立美術館（バーゼル）、オンタリオ美術館（トロント）、ロサンゼルス・カウンティ美術館（ロサンゼルス）、シカゴ現代美術館（シカゴ）、サンフランシスコ近代美術館（サンフランシスコ）、スミソニアン・アメリカ美術館（ワシントンD.C.）、テート・モダン（ロンドン）、ホイットニー美術館（ニューヨーク）など

※1）選考委員

- | | | |
|------|-------|---------------------------------|
| 委員長 | 住友文彦 | アーツ前橋 館長／東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科 准教授 |
| 副委員長 | 飯田志保子 | キュレーター |
| 委員 | 野村しのぶ | 東京オペラシティ アートギャラリー キュレーター |
| | 保坂健二郎 | 東京国立近代美術館 主任研究員 |
| | 藪前知子 | 東京都現代美術館 学芸員 |

委員長コメント

シアスター・ゲイツの作品をはじめて体験したときの記憶は忘れがたい。古い建物の階段をあがり部屋に入ると、空き家だった部屋に古い建材や壁紙といった廃材が丁寧に再配置されていることに気付く。その模様や形をじっくりみているうちに、ごく自然にハーブティーをすすめられた。それはカッセルの街を歩き回り、少し疲れたからだに染み入る。別の部屋に進むと歌が聴こえてくる。情感たっぷりだが全体の佇まいとなじんだ音量でブルースやジャズが流れてくる。とても居心地よく、親密な気持ちをおぼえる体験だった。

その後すぐに彼がシカゴで実践しているドーチェスター・プロジェクトのことを調べた。これは建物の再生と異なる世代が参加できるコミュニティプログラムを実践するゲイツの代表的なプロジェクトのひとつだが、もっと驚いたのはゲイツが作陶のためにほぼ毎年のように日本を訪れていると知ったことだ。シカゴに住むアフリカ系アメリカ人のアイデンティティと深く関わる空間や作品の制作と、常滑地方で継続している作陶がいったいどのようにむすびつくのか。強大な資本が個人の精神を荒廃させてしまう現代社会において、自分たちで生産し、共同体のつながりを復活させようとする彼の仕事は民族の違いを超えてしまうだろう。そして作陶だけにとどまらない提案やプロジェクトを日本で見たいというのが、選考委員が一致して望んでいることだ。今や世界中を飛び回るアーティストだが、おそらくもっともよく知っている国のひとつでどのような都市のヴィジョンを見せてくれるのだろうか。前回の対象者である会田誠とは異なるものになり、この助成事業が持つ可能性を押し広げてくれることをとても期待している。

住友文彦

《都市のヴィジョン - Obayashi Foundation Research Program》助成事業 について

この財団は、1998年9月に、「財団法人 大林都市研究振興財団」として設立されました。その名前が示すとおり、都市に暮らす人々に豊かな生活をもたらすような都市づくりを実現するために研究活動に従事されている方々への支援を通じてわが国の都市研究の発展を後押ししようと微力ながら努力してきました。2010年9月に内閣府から公益財団法人として認定していただき、2011年9月に現在の「公益財団法人 大林財団」の名称に変更しましたが、同じ基本理念を貫いて来ました。

日本は、戦後復興を経て高度経済成長を達成し、物質面ではかなり豊かになり、都市環境も効率的で利便性の高いものとなりました。しかし、豊かになったと言われる日本の都市も、そこで日常生活を営む人々の心も本当に豊かになったかと言えば、答えに窮するところです。戦後しばらく日本は戦争で焼きつくされた国土を復興させるのに必死でしたし、他に類を見ないほど自然災害の多い国であることを考えれば、まずは国民の生命を守る頑強なインフラの構築が長い間国の使命であったことは頷けます。

また一方で、世界を見ると、貧困にあえぐ地域が多数存在し、その人たちにとってはその地域のどのような施設も生きてゆくための手段でしかありません。さらに、これは世界中で言えることですが、都市への過剰な人口集中、自動車の普及や産業の集積などによる大気汚染、自然環境の喪失、温暖化ガスによる異常気象の発生などの諸問題が生じました。近年日本では、少子高齢化に伴い人口が減少する中で空き家の放置や孤独死といった社会問題も起きています。

そこで、人々に豊かな生活をもたらすような都市づくりというものを再考し、人との交わりという部分で都市を研究することによって何らかの貢献ができないか。都市があり、人がいて、そこで様々な関わり、例えば芸術、経済、環境、歴史など都市と人間に関係する幅広い分野での研究を支援しようと考えたわけです。

この助成事業では、都市工学や都市の専門家ではなく、豊かで自由な発想を持ち、さらに都市のあり方に強い興味を持つ国内外のアーティストにお願いし、都市における様々な問題を考察し、住んでみたい都市や新しい、あるいは、理想の都市のあり方を研究してもらうこととしました。

考えてみれば、都市というテーマを研究したり考察したりするアーティストを支援している組織というのはこれまでなかったと思います。それに応えるのが、この《都市のヴィジョン - Obayashi Foundation Research Program》という助成事業です。

公益財団法人 大林財団
理事長 大林剛郎

取材・広報用画像のお問い合わせ先

TAIRA MASAKO PRESS OFFICE 担当：平昌子 masako@tmpress.jp M 090-1149-1111